

「大変でも頑張る」経験を通して 自らの選択に責任を持たせる

東京都 福生市立福生第一中学校

以前は、生徒の「荒れ」が目立っていた福生市立福生第一中学校。生徒に規律を守ることを徹底させることから始め、次第に班活動を増やし、生徒が自ら行動する場面を増やしていった。学校が落ち着いてきた今、指導は次の段階に移ろうとしている。

二分していた指導方針を一本化 生徒の落ち着きを取り戻す

2009年度、新藤美知子校長が福生市立福生第一中学校に赴任した時、生徒の「荒れ」に対する教師の指導は二分していた。授業中に教室を抜け出したり、集会にきちんと集まらない生徒に対し、一人ひとりとしつくり話して諭す教師がいる一方で、一律のルールを定め、守らない生徒には厳しく指導する教師がいた。

新藤校長が1年間、生徒を見取った結果、主体的に考える力が育っていない生徒が多い

ために荒れが起こるのだと判断。まずは学校生活上のルールを明確に定めるべきと考え、その方針を教師に伝え、指導の一本化を図った。新藤校長はこのように振り返る。

「教師によって指導に多様な価値観があったよと思いますが、本校の場合、生徒指導が厳しい状況にあったため、全ての生徒が守るべき一線をはっきりさせ、それを浸透させることが先決だと考えました。教師間でルールをしっかりと共有し、組織的な指導を徹底しました」

こうして、10年度、生徒に対する指導はより厳しいものに転換した。

School Data

◎1947（昭和22）年開校。教育目標は「健康で思いやりのある人を目指し、①すすんで学びよく考えよう、②正しく判断し実行しよう」。2、3世代が通う家庭も多く、地域社会と連携して教育の充実を図る



校長◎新藤美知子先生

生徒数◎475人 学級数◎16学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒197-0003 東京都福生市熊川 845

TEL◎042-551-0321

URL◎<http://academic4.plala.or.jp/fussa-1j/>

公開研究会◎未定

生徒に中学校生活の心構えを伝える最初の機会には、入学直後に行う2泊3日の「スプリングスクール」だ。初日に、中学校での生活や学習は小学校と異なることを伝え、集団の一員として判断し、行動することや中学生としての自覚を求める。また、学習は朝から夜まで9時間を課す。入学したばかりの中学生にとって負担の大きい行事であるが、こうした3日間の共同生活を通して、「服装や時間のルールは絶対に守る」「目標に到達するために必要な勉強は必ずしなければならない」といったことを徹底していく。

日常の指導も厳格化した。例えば、集会に

主体的な進路選択——自らの意思と責任で決める力を育てる

少しでも遅れた生徒を厳しく叱る、授業中は教師が廊下を見回り、抜け出している生徒がいたら教室に返す。床にガムの包み紙が落ちていたら、捨てた生徒が名乗り出るまで許さない——。生徒と教師の根競べのような指導が続くうちに、次第に生徒の間に「先生は絶対に妥協をしない」という意識が浸透し、学校は落ち着きを取り戻していった。

「今では、集会は整然と進み、授業を抜け出すような生徒はいません。『荒れ』は克服できたといえるでしょう。しかし、それは表面的なもので、教師が『型』を崩さないように必死に指導しているからであり、生徒が自ら考えて行動しているわけではありません。校内が落ち着いたら今、次の段階として、『変わる一中から磨く一中』を目標とし、生徒一人ひとりを磨いて、自己判断する力を育てたいと考えています」(新藤校長)

◎自立を促す工夫①

小集団でのリーダーを育て 責任感や自主性を芽生えさせる

生徒を磨く取り組みとして11年度に始めたのは、小集団のリーダーの育成だ。

各クラスに6つの班を設け、自薦や他薦、担任の指名などによって班長を決める。班長は、提出物の回収や清掃の指揮など、生徒会が中心となって決めた作業を担う。班長の役割を明確にして作業を任せること、リー

ダーシップを芽生えさせようというわけだ。班長は、毎日、帰りの会の後に行う10分間の学習タイム(写真1)で、プリントを採点して回収する役割も担う。こうした役割の積み重ねにより、次第に班長は班への責任感を抱き、班をよりよくする方法を自ら考えるようになるという。

班長以外の生徒にとっても、班はいわば共同体となり、互いに教え合ったり注意し合ったりする関係が生まれているという。3学年主任の田中雄二先生は次のように話す。

「自分一人では善悪の判断が難しくても、班で話し合うことでよい方向に進むこともよくあります。また、多少つらいことがあっても、他のメンバーと一緒にあれば頑張れることもあるようです」

班活動は、学習にも好影響を及ぼしている。数学などのグループ学習も班ごとに行っており、班長を中心に自然に教え合う姿が見られるようになった。

「『友だちから教わることは、決して恥ずかしくない』と思うようになり、自分から意見を出すことにも積極的になりました。試験前には、友だち同士で教え合う光景が当たり前になりました」(田中先生)

12年度は、全学年の班長を集めた班長会議を実施する予定だ。班長同士が話し合い、学校の課題を考えたり、班運営がうまくいかな班長に対して上級生の班長がアドバイス



福生市立福生第一中学校校長
新藤美知子 しんどう・みちこ
「日々全力で生徒に接する。少しでも常に前に進む気持ちを持ってほしい」



福生市立福生第一中学校
田中雄二 たなか・ゆうじ
3学年主任。「親や自分を支えてくれている全ての人たちに対する『愛』を大切にしたい」

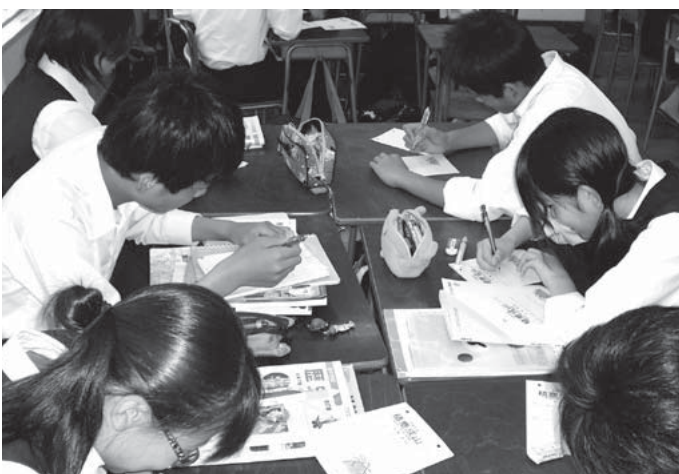


写真1 帰りの会が終わると10分間の学習を行うが、班で机を寄せ合って取り組む。ここでも、分からない問題を教え合う姿が見られるという

したりする場になりたいと考えている。「これまでは教師が全てを指導していましたが、班を基本的な行動単位として、少しずつ生徒の自治に委ねていきます。自分たちが

考えられるようになった段階で、徐々に『型』を外して自立させたいと考えています」（新藤校長）

●自立を促す工夫②

保育園や福祉施設での体験学習を通して自己肯定感を高める

生徒の精神面の成長を促すために、11年度からは2年生で行う職場体験の訪問先を保育園や高齢者福祉施設に限定し、一緒に遊んだりお世話をすることを通して勤労観を育む取り組みを進めている（写真2）。体験先を限定したのは、勤労観を育てるために、活動を通じて自己肯定感も併せて高めたいというね



写真2 保育園での職場体験の様子。生徒は小さな子どもたちと一緒に遊び、慕われるうちに、自己肯定感を高めていく

らいがあったからだ。

「小さな子どもから『お兄ちゃん』と慕われたり、高齢者から感謝の言葉を言われたりする体験によって、自分も誰かを助けたり喜ばせたりすることが出来るのだと感じると共に、それが自分自身の喜びにもなることに気が付きます。このような気付きを働くことの喜びや将来を考える意欲につなげたいと考えています。普段は落ち着きのない生徒も、体験活動では相手の立場を考えて行動している姿を見ると、『やれば出来る』ということを変更して感じます」（田中先生）

12年度は、2年生だけでなく、3年生に卒業前にもう一度、「奉仕体験」として同じ施設を訪問させる計画だ。

「再び保育園を訪れ、子どもの成長に触れることで、自分自身の成長を振り返る機会にしてほしいと思います」（田中先生）

●自立を促す工夫③

次への目標を立てられるように評価の説明を行う

生徒の自立心を高めるために、評価に伴う説明も重視している。

「評価は、生徒がその結果をしっかり受け止め、自分の中で消化して、評価が悪ければやり方を改善する、良ければ新たな目標を立てるなど、次のステップに結び付かなければ、意味がないと思います。評価を次の目標設定

に生かせる生徒もいますが、大半の生徒は、数字に一喜一憂するだけで終わってしまっています。そうならないように、評価規準などについて、生徒や保護者に具体的に説明するように努めています」（新藤校長）

年度初めには、教科ごとに評価の観点を確認し、定期考査、授業態度、ワークシートなど、どの要素をどれくらいの割合で評価するのかを生徒や保護者に説明する。また、学習から逃げがちな生徒には、日頃から声掛けや補習をし、学びに向かうきっかけづくりを徹底して行う。

以前、ある教科の評価が「1」だった生徒の保護者が、強い調子で教師に説明を求めたことがあった。その際、評価規準を明確に示して「1」となった理由を説明すると、生徒が「自分なりに頑張ったが、努力が足りなかった。自分が始めるのが遅かった」と納得したことで、話し合いも収まったという。

「評価は単に学習の結果を伝えるものではなく、生徒が自己を振り返る材料となるものです。だからこそ、妥協せずに評価し、正確に伝える。その代わり、日々の指導においては全力で生徒の頑張りを支援する。そうした姿勢で教師が生徒と向き合い続けることが、生徒との信頼関係をつくり、更に評価を受け止める心もつくると考えています。まず現状の自分を受け止め、自己を見つめ直すことが、主体的な行動や選択を促していく上での第一

主体的な進路選択——自らの意思と責任で決める力を育てる

歩となるのではないでしようか」(新藤校長)

●生徒把握の工夫

特別支援教育の視点から 生徒個別のサポートも導入

ただ、教師の知識と指導力だけでは、生徒の課題を克服し、自立させていくことが難しい場合もある。そこで、同校が全学年に取り入れているのが、特別支援教育の視点だ。ルール厳守の指導によって全体的には成果を上げたが、中には繰り返し指導をしてもなかなか改善が見られない生徒がいた。仮に発達障害などの課題を抱えているのであれば、個別の支援が必要だと考え、専門家のアドバイスを受けて指導に当たるようにしたという。

「専門家のアドバイスを受けて生徒の課題が明確になったことで、教師の指導方法が変わり、状態が改善した生徒もいました。学校全体に特別支援教育の視点を取り入れることは、指導面だけでなく、予算や保護者への説明の面でも勇気のいる決断でしたが、生徒の将来や進路を第一に考えた時、早期に課題を発見し、中学校でも出来る指導を行うことが必要だと考え、導入を決定しました。これからは専門家と連携を続けていきたいと考えています」(新藤校長)

また、11年度からは、早稲田大の菅野純教授が開発した生徒の心理調査「KJQ調査」(図)も導入している。これは生徒の志向を

分析するテストで、生徒にとっては自己理解の手掛かりとなり、教師にとっては生徒の内面把握に活用できるものだ。データを活用した指導のメリットを田中先生はこう語る。

「教師が生徒を見る感覚と結果は一致する部分が多く、指導の裏付けとして活用できると思えました。もちろん、教師が気付いていなかったけれども、調査結果ではある偏った傾向が見られた生徒もいました。生徒に必要な指導を考えていく上で、こうした客観的なデータは手助けになっています」

「大変でも頑張る」 自己選択に責任を持てるように

以前は高校を中退する卒業生が少なくな



「KJQマトリックス」(実務教育出版)の教師用帳票。「このころのエネルギ」と「社会生活の技術」のバランスにより4つの群に分けている
*実務教育出版社提供の資料をそのまま掲載

校長が考える進路選択力を育む工夫

良くも悪くも、生徒たちは、互いの結び付きがとても強いものです。悪い集団に入れば悪く染まってしまうし、逆に良い集団なら良く染まります。そして、生徒は、教師の指導の言葉よりも、生徒同士の関係から強く影響を受けます。こうした関係性を利用して、まず、生徒が互いに話し合いながら良い方向に自己決定が出来る集団をつくり、そこから個々に自立させるように導いていくことが必要だと考えています。そのようにして獲得した自己決定の力は、社会に出てからの進路選択にも役立つと思います。

かったが、「荒れ」が収まってからはそうした卒業生は急速に減った。「型」を完全に取外せる段階までには至っていないが、教師の努力によって「ルールを守る」「頑張れば出来る」「困難があっても頑張る」と考える生徒が増えてきているからだ、新藤校長は捉えている。

「自己の選択に責任を持ち、進路先で頑張れる力をいかに付けていくかは、今後重要な課題です。中学校だけではなく、家庭や小学校、また行政との連携を大切にしながら、生徒にとって必要な教育を考えていきたいと思えます」(新藤校長)